

## 抗戦以前の老舎文學の分期について

齋藤, 匡史  
北九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/9745>

---

出版情報：中国文学論集. 13, pp.187-205, 1984-12-31. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：

## 抗戦以前の老舎文學の分期について

齋藤 匡史

### 一

老舎の文學創作は、その多くの作品の舞臺となった北京からではなく、倫敦から始まった。一九二四年秋、倫敦に到着した老舎は倫敦大學東方學院で北京官話及び四書の教鞭をとるかたわら、余暇を利用し歐洲文學に接し、デイクENZ、コンラッドの作品から啓發を受け、三ペンスの學生作文帖に文壇登場作となる長篇小説「老張的哲學」を書きすすめる。許地山、鄭振鐸のすすめによって投稿し、一九二六年七月より「小説月報」に連載される。(註一)

近年發見された短篇「小鈴兒」(註二)を處女作と見るのが一般論となった現在では「老張」の筆をとる三年以前に老舎文學の起點を置く考え方が支配的であるが、では初期の老舎文學の發展段階をどのように捉えるかという問題については今日作品研究が不十分な狀況にあって文學の時期區分が積極的に言われていない。

抗戦以前の老舎文學の分期について

いま一九五〇年代と六〇年代の二つの老舎論（註三）を見ると「駱駝祥子」を境に文學的分期が論じられている。また「老舎の年譜」（註四）では在外時代（一九二四—一九三〇）、山東時代（一九三〇—一九三七）と区分してある。

年譜については、私は作家論の型式と考える。編者が作家の生活、創作、時代背景の事實を羅列しただけに見えながら、實はその中に事實の取捨選擇があり文學的に織り成せば作家傳ともなり得る。だが年譜は時間、空間で作家の文學を區切ってしまう事が多いし、その區切りが便宜的に文學時期の區分とされることもある。「老舎の年譜」を例として作品を當嵌めてみると、

△在外時代▽

長篇小説「老張的哲學」（一九二六）、「趙子曰」（一九二七）、「二馬」（一九二九）、「小坡的生日」（一九三〇）の四作品。

△山東時代▽

「齊大月刊」に發表した二十三篇の短篇小説、譯文、詩、雜文、評論。「論語」の三十三篇、短篇小説、小品文、雜文、詩。「文學」の十四篇、短篇小説、隨筆。「宇宙風」の十八篇、創作經驗談、小品文。「文藝月刊」七篇の短篇小説。他に二十八種の雜誌、新聞文芸欄に發表した八〇篇余の様々な様式作品（註五）。加えて長篇小説「貓城記」（一九三二）、「離婚」（一九三三）、「牛天賜傳」（一九三四）、「駱駝祥子」（一九三六）、「選民」（一九三六、單行本出版時に「文博士」に改題）、中篇小説「我這一輩子」（一九三七）。

となり、單に作品數からしても山東時代をこのように一括して論じてしまうには無理がある。また、

在老舍解放前的大量創作中，成就最高的是「駱駝祥子」。這是他的代表作，也是『五四』以來堪稱優秀的現實主義作品之一。（中略）作者通過祥子的生活和遭遇，否定了祥子個人奮鬥的道路，對喫人的舊社會提出了血淚控訴，深刻地揭露了舊社會的本質。（註六）

と高い評價をされる「駱駝祥子」を境に分期するのも公式的すぎる嫌いがあるろう。老舍文學全期から見て創作開始より一九三七年までは、抗戦期や解放後と異なり作家的生長に於いても作品に於いても紆余曲折がある複雑な時期であり、本稿はこの時期の作家と作品を俯瞰しつつ試論として一九三三年夏の長篇小説「離婚」と一九三五年夏を分期點として三つの時期區分を論じてゆく。

## 二

老舍の總論的評價に於ける批判的な見解は彼の初期の作品や政治的態度に由來するものが大部分を占める。多くの老舍論では、一九二〇年代後半から三〇年代の老舍について、往々にしてその政治への理解の淺薄なこと、運動への傍觀者の立場、更に作品の表層をとらえて恰好のマイナス材料とされ、時として「貓城記」や、短篇、雜文の小市民性或いは過度の「幽默」をとりあげて革命に對する嘲笑、批判とされる。こうした論旨の評價は結局のところ作家像を、反帝反封建の一貫した「愛國」的な作家とやや亂暴に規定してしまう。例えば「貓城記」についてみると、近年、史承鈞の「試論『貓城記』」では評價の難しい中「國民性の弱點を暴露した」作品（註七）という觀點を出すものの、革命に對する「誤まった」部分への弁護を加え、

抗戦以前の老舍文學の分期について

嚴肅的愛國主義者和現實主義者總能由於「事實的教訓」，找到革命力量，認識革命的真理。

と抗戰期の活動を稱讚し矢張り「進歩的」な「愛國」作家という評價に歸結させてしまう。かつて伊藤敬一氏は「老舎の世界」（註八）で社會科學的な觀點からの老舎批判について、

…労働者、農民、學生の組織的革命運動が描かれていないとか、あるいは老舎はしばしば革命家を戲畫化して無理解な批判を加えている、といった老舎批判の論調をよく見るが、（略）歴史的に見て、當時組織的な革命運動がひどい彈壓を受けていたことは事實であり、そのような運動が老舎の描くような庶民の視野に入ってくるほど強大でなかったことは、容易に想像できる。そしてそのようななきびしい情勢の中で、當時の革命家が、しばしばセクト主義とか公式主義とか個人的英雄主義とか極左的冒險主義などのあやまりをおかし庶民の反發をまねいたであろうことも十分考えられる。

と述べている。こうした論理はそのような状況があつたにせよ主客が轉倒し老舎批判―老舎の現實認識「欠如」を、革命運動自體の欠陥や、革命が當時の社會情勢に占める位置に求め、結果として論を一步進めたかのように見えながら、實は從來の老舎評價の枠又は延長線上にしかない。

また老舎評價で常見する老舎の現實に對する認識が客觀情勢に追いつかないとする見解をもってすれば、物心つきはじめた辛亥革命後の政治的混亂、教育者として進んだころの五四新文化運動、南の革命政權と北の軍閥の對峙にあつた渡英前、國共合作、北伐と續く革命運動の挫折を遠くにした倫敦時代はもとより、死去する一九六六年までいずれの時期にも情勢に一步遅れていたと論ずることもあながち不可能ではない。更に老舎自身が述べるところ

の父親亡き後の困窮と貧しさゆえ理想や夢とは遠い存在であった云々を以って、社會の變動に主體的に參加し歩調を合せられなかったと額面どなりに受けとられてもいる。だからと言ってこうした視座からの老舎評價が無意味であるとは考えないが、少なくとも評價は膠着化し弁解を加える余地のみがわずかに残されているにすぎないといえまいか。ここで老舎の「洋」と「中」についての視點を以って改めて彼の當時の社會觀を検證し第Ⅰ期（一八九九年—一九三三年春）について述べてみたい。

老舎の「洋」との最初の關りは、きわめて特異な出來事に始まる。一九〇〇年義和團運動の鎮壓にのりだした八ヶ國連合軍の北京侵入に起る略奪、暴行、放火が生後間もない彼の身にもせまり泣聲一つあげれば恐らく洋兵の銃劍に幼い命をおとしたであろうと言う。生々しい體驗は、旗人として北京防衛で戦死した父親のありさまと共に母親から語りつづけられ、洋兵に對する恐怖と仇恨が幼時より腦裡に焼きついている。義和團運動六〇周年に書かれた四幕劇「神拳」（一九六〇）は「吐了一口氣」（註九）にあるようにこの幼時體驗以來胸中にあつたものをまさに吐き出した作品であり、義和團讚歌の中に作者の洋兵や洋教への復讐が假託された作品である。生々しく又どろどろしたものが生涯にわたり浮沈濃淡はあるものの決して消滅することなく存在し續けた事は注目すべきであろう。

また處女作「小鈴兒」では主人公の小學生小鈴兒をして粉飾することなく「洋」への憤りを表わした。學校刊行物に載せるには物騒な内容で生徒を煽動すると誤解されかねない作品だが、混雑とした社會情勢にあつて素直な正義感や愛國心を訴えるという明解さを持っている。小説というより道徳講話に近い。ただ見落せないのは、正義感や愛國心が外敵に向けられるだけで、老舎が愛すその對象は國家が機能しない四分五裂の中國で、中國弱體化の内

因を觀察し始めるのはのちの事である。

辯論部の顧問や校誌の編集委員として活躍していた老舎が、半年で南開中學を辭職する理由が釋然としないが、北京に戻り翌年「洋人」の國へ赴くことになる。渡英に至る經過については具體的に明らかにされつつあるが（註一〇）目的については、國內の俸給より良い（註一一）、英語を學び小説を讀むため（註一二）、國外へ出て見聞をひろめようとするもの（註一三）等々諸説があつて定かではない。

注目すべきは、基督教の教會刷新運動に關與し、牧師を通じ燕京大學の英人教師のあつせんで渡英が決まったことである。老舎と基督教については「中國本色教會運動と老舎」（註一四）に、外國人が運營する教會を、中國人の手にとり戻す刷新運動に參畫し、自らも洗禮を受けた事實が言われている。だがイギリスへ渡る前に得た南開中學の教師職、歸國後迎へられ前後四年余りを過ごした齊魯大學がミッション系校で、ここから基督教が初期の老舎に影響を與えたと推則するのは、倫敦で書いた「二馬」に見える偽善的で中國人への蔑視に満ちた英國人牧師を一つ例にとつても疑問である。基督教との關りで老舎の意圖するところは、中國人の手に教會を取り戻すことにあり、それは「以華人爲中心之宗教事業」（註一五）の目的のため、きわめて合法的かつ穩便に洋人の横つらを打つ行爲として見る方が順當と思える。

こうしたいきさつからして渡英は洋「經」を取りに出たのでも外國への憧憬でもなく、鴉片戰爭以來中國へ「近代」の刃をつきつけて來た英國と英國人への冷やかな關心とでも言うべきものが彼を動かしたのではなからうか。老舎が英國で印象を強くしたものは産業革命以來の強大な近代國家ではなく、その病弊であつたし、觀察したのは

西歐文化ではなく複雑な社會であつた。「二馬」の初めの部分は天下のすべての惡を勞資雙方が一方にかぶせて資本家階級打倒、社會黨打倒を各々が高呼する情景から始まり、ストーリー展開に近代社會とそこに生きる人々への批判がちりばめられる。歸國後も林語堂の主宰する雑誌「西風」に四篇、留西外史として英國人と英國社會を諷刺しており、當時歐米社會や文化に憧憬をいただき、中國社會にその「精華」を移入せんとしていた洋行歸りのインテリや開明紳士に對する批判は「犧牲」(一九三四)、「選民」(一九三六)に形象化される。また「洋味兒」の強い天津や上海の街までも嫌惡をもつた。

「二馬」には「小鈴兒」に示した直接的な憤りが西洋社會を斜視し冷笑する醒めた老舎の姿となつて浮かび、英國に在りながらそれに染まることなく、却つて視點は中國に向ける老舎を見い出せる。英國への冷やかな關心は、すぐさま百八十度中國に轉換してゆく。

英國での第一作「老張的哲學」は習作であり、發表のつもりは無かつたと言ふ。それは異郷にあつて故地への慕情をつのらせた作品でもなく、「二馬」のようにある種の問題意識から設定されたドラマでもない。作家が過去に身を置いた教育界に題材をとりながら老張のようなゴロッキとそれを指導する役人―かつての老舎自身であり、老舎は惡徳私塾を職務への忠實さから度々告發した―を徹頭徹尾の「幽默」で笑い飛ばしている。技巧の上では全く舊小説の章回型式を踏襲し、第一段では物語りへの導入として主人公とその世俗哲學をのべて全篇の解題とし、每段小さな出來事をつなげ、最後に登場人物各々の結末を付している。

第二作「趙子曰」は「老張」が「小説月報」に連載され、「

抗戰以前の老舎文學の分期について



自己的作品用鉛字印出來總是件快事，我自然也覺得高興。「趙子曰」便是這點高興的結果，也可以說「趙子曰」是「老張」的尾巴。（註一六）

であるが、只「老張」の方は自らの體驗に基いているが「趙子曰」は五四以來の學生の動きに傍觀者（註一七）であつたため想像部分が多いと言ふ。佟家恒氏は一九三〇年以前とそれ以後に分けて老舍文學を論じており、「老張」、「趙子曰」等の作品は五四時期の社會現象が描かれ、作家の思想も同時期の社會思潮の範圍を抜けていないと述べてゐる。

帶一種理想的，甚至「空想」的色彩，暴露出他的思想的一些弱點。「五四」以後，曾經出現過一股「教育救國」、「平民教育」、「發展實業」的思潮，老舍受了這樣的思想，他把當時的一切新思想拿過來，借以反抗黑暗的現實。老舍基本上一個小資產階級的民主主義者，他的思想帶有改良主義的色彩。（註一八）

とする。この二作は中國社會の病根にメスを入れた大それたものでも、ましてや教育救國を謳つた政治小説でもない、およそ世の動きとは無關係に生きる人間への説教じみた物語のように受けとれる。改良主義について言えば、それを奉じた貓人國にあえなく破産してゆくさまを老舍は書いた。

「二馬」では中國と中國について直接的に次のように書いた。

二十世紀的「人」是與「國家」相對待的，「強國」的人是「人」，弱國的呢？狗！中國是個弱國，中國「人」呢？是——！

中國人！你們該睜開眼一看了，到了該睜眼的時候了！你們該挺腰板了，到了挺腰板的時候了！——除非你們願意

永遠當狗！（註一九）

物語の展開する中に、處々にこうした激昂した文字が並べられており、外國と中國、新と舊の對比を二層強いものにしてゐる。小説中、馬威の戀愛は男女の愛情の葛藤に民族問題をからめながら、小説全體は二つの異った社會と人間の對比、鬨りを象徴的に戀愛行爲に置き換える手法をとる。

ここに至り老舎の單純な「洋」と「中」の圖式は終りを告げ、歸國によって中國の現實と取り組まねばならなくなり、徐々に中國の弱體化は「洋」の力の前にあつて起つたのではなく、中國と中國人自身が内包していた諸々の矛盾によるものであることを覺醒してゆく。

魯迅が仙臺醫專時代に所謂幻燈事件によって醫を棄て文學を志した如く、艾蕪が雲南、ビルマの放浪のあとラングーンで觀た映畫によって文學に目覺めた（註二〇）如く劇的ではないが、「二馬」を境に文字を以つて世に訴えるという意識の變化が窺えて來る。

### 三

一九三〇年四月シンガポール經由で歸國した老舎は、上海の鄭振鐸宅で「小坡の生日」を脱稿し五月北京へ戻る。

國內の情況は六年前とは大きく變化し、北伐を完了した蔣介石は南京に盤踞し、東北、華北の外憂、紅軍と共産黨、民衆の抗日運動という内憂の狹撃にあいながら政治的小康を保持していた。老舎は濟南に齊魯大學文學院副教

抗戰以前の老舎文學の分期について

授の職を得て教鞭と文筆の二重生活が始まる。同時に「齊大月刊」の編集にもたずさわり、譯文、詩を發表、三一年一〇月同誌に歸國後初の短篇小説「五九」を發表、また一九二八年五月に日本軍によって起こされた濟南事件の資料を収集し、長篇「大明湖」の創作にもとりかかっている。「五九」は二千字足らずの短篇で、短篇に本腰を入れるのは三三年國に入ってからのこと。三十六年雜誌「宇宙風」八期の創作經驗談「我怎樣寫短篇小説」に述べるように、この世に不完全な長篇の存在は許されても、短篇はそう見てもらえないことに氣づいて「寫着玩」の態度を止め眞劍に短篇と取り組むのは三三年夏「大悲寺外」あたりからで、歸國からそれまでの彼の態度は以下の一文によく表われている。いずれにも収録されておらずここに全文を掲げる。

我對中國將來的希望不大，在夢里也不常見着玫瑰色的國家。即使偶得一夢，甚至吉祥，又沒有信夢的迷信。至於白天作夢。幻想天國降臨，即不治自己的肚子餓，更無益於同胞李四或張三。擬個五年或十年計劃，是謂有條有理，與中國邏輯根本不合，定會招愛國與賣國志士笑門掉牙。生爲糊塗蟲，死爲糊塗鬼，糊塗的有福了，因爲天國是他們的，大有希望，且勿着急。天增歲月人增壽，春滿乾坤福滿門。天長地久，糊塗的是永生的，這是咱們。得了滿洲，再滅了中國，春滿乾坤，這是日本。揖讓進退是古訓，無抵抗主義是新名詞，中華民國萬歲！（註二一）

三三年夏以前の短篇、小品文、詩にも同様に國事に對して無關心を裝う裏に國家と民族の現状への強い不滿、焦躁がこめられている。そして現實への徹底した諷刺を試みたのか「貓城記」であり、現實社會と政治、中國と中國人への絶望的な視點を彼は忌憚なく示した。本人の言を借りれば、「貓城記」創作の動機の一つに國事に對する失望があり、失敗作とする理由には、諷刺か諷刺のリアリティを持たず説教じみており積極的な主張や提議が無かつ

たからだとする。(註二二)

拳をふり上げたものの何をどう打つたら良いのか、作家自身が明確に把握できておらず、三三年夏までの作品は、中國も外國も、反動も革命も、『インテリも張三李四も、おしなへて打たれている。』「貓城記」以後は作品のトーンは沈み、激昂した文字は見られなくなり軽薄な「幽默」も次第に姿を消してゆく。

中野美代子氏は「老張」から「駱駝祥子」以前までを一つの創作期とする考えに立ち、

老舎が二六年以來發表した小説は「張さんの哲學」、「趙子曰」、「馬父子」など、いずれも動亂の時代と無縁にその日その日を「敷衍」し自分本位に生きていく民衆の姿を「幽默」をもって描いた作品ばかりであった。

(註二三)

とし、動亂の中に切實に生きる人々も、その激動に背を向けてひっそりと或いはおもしろおかしく生きる人々の存在もあり、老舎は時代の冷静な認識者として、現實と距離を保ちその保とうとする意識が作品世界構築のバネになったと述べる。また「貓城記」を書いた三三年ごろから、

シンジズムを少しづつ放棄しはじめ、三六年の名作「駱駝祥子」にいたり(註二四)

「敷衍」が終りを告げるとする。(また中野氏はこれより先「老舎—『幽默から正經へ』の道」において、老舎は中國人と自己の「敷衍」性、無國籍性を認識し、老張、趙子曰、馬威、小蠟等の人物を創造し、その認識にまつわる抑壓意識と反動としての醒めた意識が「幽默」であり、「離婚」に至ってこれらの認識は冷徹に整理され、單純化されてリアリティを獲得したとも述べている。)

抗戦以前の老舎文學の分期について

いま短篇集「趕集」(一九三四年九月)に収録された十五篇の色分けをするならば、「大悲寺外」以降の作品には、暗さ、悲愴感が濃く漂い文章も嚴肅さが目立つようになる。勿論老舍は國內に戻った時點で文壇の流行作家としての地位が用意されており、上海事變後而後の筈のように發刊される雜誌の求めるところに應じて、それぞれの要望や雜誌の性格に合わせた文章、作品を寄せており、三三年以降も依然として笑話に屬するような「幽默」を完全には捨て去っていない。

「愛的小鬼」、「熱包子」、「同盟」の三篇には「五九」の中國人には希望がないと嘆き涙さえする張丙の如き人物さえも姿を消し、日常瑣事や個人的小事に奔走する小人物がずらりと登場する。技巧の上では短篇を手掛けたばかりで拙さがあり、人物形象も克明でない。ところが「大悲寺外」から「歪毛兒」、「微神」、「柳家大院」、「鐵牛與病鴨」、「黑白李」等の作品羣には、以前のようないかげんな人物がなくなり、人生を眞摯に見つめる實直だがそれゆえ馬鹿をみるという人々が現われる。作品は重厚さを持ち、發生する出來事は悲劇的で悲哀感を伴った笑いが見えてくる。ここでは同時期に發表された小品羣——大部分が「老舍幽默詩文集」(時代圖書公司、一九三四年四月)に收められている——とは違った角度から見た世界が構築され、二面性を持つかと思えるほど作家のイメージがずれて来る。ここに至り作家自身が民衆や作中人物と共に「敷衍」するという處世術を棄て止揚し、**基本的問題への積極的關與にまては至らずとも、それを廻避し斜視する姿勢から、存在に眼をむけ認識しようとする方向に變化して來ていることは確かである。**「離婚」はまさにその節目にあり前者短篇羣の成熟した完成體とも言うべき成功作であつた。

以上一八九九年から一九三三年夏の創作の轉換期に至る第一の時期を概括的にとらえた。

#### 四

第二期を一九三三年夏から三五年夏、つまり三四年六月に齊魯大學を辭職し專業作家としてやっていこうとするが出版界の狀況がそれを許さず、再び山東大學へ再就職し、三五年夏青島の文化人らと「青島民報」避暑録話を執筆するまでとする。

老舎は英國滯在中に教鞭の余暇に、ギリノヤ古典、歐洲中世から近代寫實主義文學に至るまで幅廣く讀んだが、アリストファネスの喜劇、ダンテの「神曲」ぐらいいしか興味を示さなかった。また一九二八年からは英佛近代小説を讀みはじめ、ウエルズ、コンラッド、メレディス、ハクスレイ、フローベル、モーパッサンが愛讀書となる（註二五）。「老張」を書く動機となったのは、ディケンズの「ピノクウイノク外傳」、「ニコラス・ニクルビー」等の作品であった。一九二〇年代、文學研究会や創造社は、外國文學、文學理論、批評等の翻譯、紹介という作業が各々の文學活動でかなりの比重を占め、これが新しい文學の擔い手たるインテリ青年へ多大な影響を與えている。だが老舎にあつては時間的、空間的にこの動きに直接かわりを持たなかったし、古典から近代小説まで英語讀解力がありながら歸國ののちも幾篇かの譯文を大學刊行誌に發表したぐらいであり、英佛近代文學理論も、作法も彼自身の文學的營爲には大きな影響を與えなかった。渴いた大地に雨露が浸み込むかの如く西洋近代文學、思想を攝取する中で、インテリ達は封建的呪縛からの個の解放、暗黒社會への挑戦として文學作品を世に問うた。老舎と同時代

抗戦以前の老舎文學の分期について

に出發した丁玲（「夢珂」一九二七年）や巴金（「滅亡」一九二九年）と比較してみると、今更ながら作家の個性の相違という範圍を越えた本質的な差異を感じずにはいられない。この點についてここで深考する用意はないが、敢えて言うとすれば老舎の場合、先に述べた「洋」への視點が存在しバタ臭いものへの反發があり、多くの論者のいうところの前近代的な「傳統的物語」の世界に抵抗なく入り得たし、中國的手法で中國と中國人と時代を描くことを旨としたのである。

自分自身も洋行歸りのインテリでありながらあまりにも重い中國と中國人への内省を負つて戻つて來た老舎には、様々な矛盾に直面する中國と中國人という現實がせまってくるばかり、それをどう捉まえるかが精一杯で、インテリ達の革命主張は老舎の頭上を飛びかうのみ、又別の一羣のインテリは己の地位保持と權威發揚に腐心專念と彼には見えた。「貓城記」の小蠅―外國で何年も生活し全てを知っている貓國の學者たちの輕薄さを批判しながら、本人もそのうちの一人として如何なる問題も解決しようとしぬ民衆の中にあつては「敷衍」してゆくしか方法がないと考える人物―には、そうしたインテリ達への批判が込められている。「貓城記」中の「私」は「敷衍」をするに至つて小蠅と同格になり、小蠅の立場は「私」を通して見たものでなくなり、「私」と小蠅の視座の分化が始まる。ゆえに、「貓人國」はまだ希望があるとす「私」と、貓人國のインテリを批判する小蠅とに老舎の眼が分化して顯れねばならない認識が、老舎の小品文に表わされていないと中野氏は述べるが（註二二）、すでに論述したように、その分化は「離婚」以降の短篇羣と小品文というジャンルをへだてて發生しており、一つの作品としては、一九三四年四月、「小説月報」停刊ののち文壇で最も影響力のあつた文學誌といわれる「文學」（魯迅、陳望道、郁達

夫、鄭振鐸らが編集委員）の第二卷四期に發表した短篇小説「犠牲」に視座分化をはっきりと見てとれる。

「犠牲」の登場人物は、「私」とその友人の老梅、「美國博士」の毛博士、毛博士が犠牲をはらって獲得した夫人の四人である。ハーバード出の博士は、アメリカ精神で萬事物ごとを處理し、アメリカ人のもの見方で世事を考えるの旨とするものの、中國ではその精神を發揮する土壤が無く、そのもの見方を運用するにも現實はアメリカとかげ離れ、理想と現實の差に落膽の日々を送る。名譽ある「美國博士」は遂に數々の代償と犠牲の上に最高の理想としてきたアメリカ式小家庭を築く。しかし裝飾品或は性的行爲の對象扱いしかされない夫人は家を出、博士は氣がふれてしまうという話になっている。この中で「私」は毛博士を觀察する。

這位博士確是眞誠，他眞不喜歡中國人的一切——除了地毯。他生在中國，最大的犧牲，可是沒法兒改善。（略）自然，我不能相信美國精神就象是他所形容的那樣，但是他所看見的那些，他都虔誠地信奉，澡盆和沙發是他的神。我也想到，設若他在美國就象他在中國這樣，大概他也是沒看見甚麼。（註二七）

「私」は彼の苦悶を解消してやることもできないし、彼の奉ずるところを分け與えてもらうつもりもないが、この毛博士という人物が一體何故こうなったのか更に觀察を續けると、

人必須有點甚麼抓住自己的東西。有的人把這點東西永遠放在嘴邊上，有的人把他永遠埋在心里頭。辦法不同，立意是一個樣的。毛博士想把自己拴在自己的心上。他的美國精神與理想的小家庭是掛在嘴邊上的，可是在後面，必是在這「後面」才有眞的他。（註二八）

と悟る。老舎はここに至りジャンル上で小品文との視座分化の上に、更に自分をも含めて「毛博士」性を抽出し再

抗戰以前の老舎文學の分期について



度分化させているのである。しかも毛博士のような人物に同情を示し、苦悶するインテリが彼の批判の主たる對象ではなく、矛先を別に向けねばならぬという認識段階に進んでいる。いつも感情が理性の前を歩いていた前一期の作品からすると作家の成熟度は愈々増してくる。

第三期については多くを述べるまでもないが、「駱駝祥子」にその始點を置くより、三五年夏より創刊された雑誌「宇宙風」に連載を始めた「老牛破車」からとしたい。この創作經驗談は全部で十四篇にもわたり、「老張的哲學」以來の文學活動をしめくくる意圖をもつものである。

「駱駝祥子」は三六年春、同僚の一人から語られた三頭の駱駝と車夫の實話を長篇としたもので、夏に脱稿するとすぐさま長篇「選民」にとりかかる。「選民」は他でもなく「犠牲」の毛博士の實話を基にしたもので、主人公、文志強もアメリカ歸りの留學生で、中國に未來が無いのは自分のような有爲な人材を登用しないことに原因があると思ひ込む、大いに賣り込むのだが、政界の黒幕を通じて彼が得たのは、濟南の幽靈團體の責任者という閑職。この土地の名家から嫁をもらって經濟的基盤と肩書きで官界に昇ろうとする。だが結局のところ外國のやり方も通用せぬまま知らず知らずのうちに土着の政界ゴロとなってしまうというストーリーである。この作品が何らの論評も受けていない理由として、一つには「駱駝祥子」の存在の大きさがあり、二つには連載途中、華北が風雲急を告げ、蘆溝橋に砲火が起こり、そのせいか後半部分が話の筋のみを追うかたちで終ってしまったことがあげられよう。

濟南の老舎にもこの戦火がせまり来る。三七年夏、北平が陥ちてから濟南に逃れた教師、學生を後方に送る「平

津流亡同學會」(共產黨地下組織が指導)が組織され、この團體が中心となって山東省文化界抗敵協會が成立する。老舍はこの發起人を引き受け(註二九)この時點から抗戰への積極的參加を腹に決めたようである。そして一九三七年十一月十五日夕刻、夫人と子供達を濟南に残して、一人抗戰の臨時首都―武漢へ旅立つ。

## 五

老舍文學は抗戰期に至り彼が至上とした抗日救國に情熱がそそがれる。本稿はそこに至るまで作家の現實認識を作品に照らしつつ文學分期を次の三期に區分して論じた。

△第一期▽一八九九年から、一九三三年夏まで。

△第二期▽一九三三年夏以降、一九三五年夏まで。

△第三期▽一九三五年夏以降、一九三七年秋まで。

特に各時期の呼稱をつけなかったが、恐らく老舍の生涯をたどり終えた時にそれが決まるであろう。

本稿は一九三〇年代の文壇に於ける老舍評價、また文壇や文學運動との關連について全くに等しい程言及していないが、手元の資料では論ずるに困難があり、不備を承知で書きすすめた。この點については、いずれかの機會にゆずりたい。

註

- 一、「小説月報」連載に至る経緯については老舎自身の言と、羅常培「我與老舎」(「中國人與中國文」一九四五年開明書店)の回想とく違っており事實關係は不詳。
- 二、一九二三年天津の南開中學教師時代に學校刊行誌「南開季刊」に發表、一九七九年に發見される。
- 三、伊藤敬一「老舎」「現代中國の作家たち」一九五四年和光社。中野美代子「老舎」く幽默から正經への道」、東京大學文學部中國文學研究室編「近代中國の思想と文學」一九六七年。
- 四、柴垣芳太郎「老舎の年譜」改訂試稿「龍谷紀要」第四卷二號、一九八二年。
- 五、作品數は、老舎小説全集第十卷「四世同堂(下)」卷末「老舎年譜」をもとに筆者が補遺したものによる。
- 六、韓連仲「老舎和他的『駱駝祥子』」「三十年代作家作品論集」(一九八〇年一〇月四川人民出版社)に收録。
- 七、「中國現代文學研究叢刊」一九八二年四期、一二〇—一二二頁、北京出版社。
- 八、東京大學教養部「外國語科研究紀要」二〇卷二號、一九七二年。
- 九、「小花叢集」(一九六三年)に收録、「神拳」の創作につ

いて述べているが、些か當時の反米キャンペーンを意識して書かれている。

- 一〇、横山永三「老舎と英國」「山口大學文學會誌」第二七卷、一九七六年一月。王行之「胡絮青談老舎」「人物」雜誌一九八〇年第一輯。
- 一一、「胡絮青談老舎」註一〇。
- 一二、老舎「我怎樣寫『老張的哲學』」、老舎「習作二十年」、「老舎論創作」一九八〇年二月上海文藝出版社版による。
- 一三、胡金銓「老舎和他的作品」「明報」一九七四年九卷一期。
- 一四、一九八四年三月老舎研究會に於ける研究發表(高橋由利子、渡邊安代氏)
- 一五、舒舍予「北京缸瓦市倫敦教會改建中華教會經過紀略」雜誌「中國語」資料紹介、(一九八三年六月號、大修館書店)
- 一六、「我怎樣寫『老張的哲學』」註一二による。
- 一七、「我怎樣寫『趙子日』」註一〇二による。
- 一八、佟家恒「老舎小説研究」一七〇—一七三頁、寧夏人民出版社一九八三年九月。
- 一九、「老舎文集」第一卷、四〇九頁、人民文學出版社。
- 二〇、吉田幸夫「艾蕪傳」「目加田誠博士還曆記念中國學論集」一九六四年。

二一、「東方雜誌」一九三三年新年號（三〇卷一期）、中國の將來についてのアンケート回答。

二二、註一二「我怎樣寫『貓城記』」

二三、中野美代子「中國人の思考様式」講談社現代新書一九七四年。

二四、註二三。

二五、老舍「讀與寫」「老舍生活與創作自述」一九八〇年香港

#### 三聯書店。

二六、註三「近代中國の思想と文學」二四五―二四七頁。

二七、老舍「犧牲」「老舍短篇小說選」三三頁、人民文學出版社一九八一年。

二八、「犧牲」同三四頁。

二九、方殷「痛懷老舍」「社會科學戰線」一九七九年一期。

抗戰以前の老舍文學の分期について